

資料論文

に向けた難波からのコメント

■幾田伸司「平成期中学校国語教科書における読み物教材の採録状況」

教科書の教材採録状況や変遷は、社会の「無意識」を追究する重要な手がかりを与えてくれる。幾田氏の論考は、各教科書がいかにして「定番」と「時代性」のバランスに苦勞してきたかを見せつけた。それは「平成」が、時代の「踊り場」であったことともつながる。新たな「定番」が次の展望を示してくれるとしたら、「書き下ろし」教材によって教科書が作家の新たな発表メディアとなることが「時代の定番」になっていくかもしれない。

■一色美緒「いじめの実例から考える学級経営」

本論考の重要な指摘は、教員個人の力量ではどうしようもできない事態（教員の欠員、地域の課題等）があるということである。本論考は白松（2017）を踏まえて「必然的」「計画的」「偶発的」と分類しておりこれは有益であるが、「偶発的」事象の中に、学校や地域の状況が投影された「社会的」事象もあるということなのである。「いじめ」を「社会」の問題と捉え直すべきなのである。本論考から改めて「いじめ」を考え直したい。

■何洲全・赫至琪「台湾におけるコンピテンシー教育の授業開発—国語教材「楊修猜字」を例にして—」

台湾小三に対して行ったコンピテンシー教育としての実践報告である。英才で有名な楊修の「字謎」物語の教材を使い、要約、人物像についての討論、そしてオリジナルの字謎づくりと盛りだくさんの活動が仕組まれている。教材自体が持つ特性が生かされることで、コンピテンシー教育と知識理解とが豊かに接合した実践となっている。要約の目的意識生成や、より広い歴史的文脈での位置づけなど、考えたいことも多く生まれる論考である。

■篠崎祐介「動画配信を活用した国語科学習指導案の作成指導の省察—教育観との関連から—」

篠崎氏がもつ教育観（＝思想）と自身の実践（国語科教育法）とに乖離があることを自覚し、自身の学生へのコメントを第三者的に分析考察したものである。ここには、自身の自覚化された教育観を押し付けず、自覚されていない実践観（指導観）を自覚化しようとする真摯な「教育者」の姿がある。自覚化された教育観と、学生に教えるべきことを教えつつも抑制的である実践思想の、その両者の根底には＜応病与薬＞の＜願い＞が見える。

■高橋茉由「文学の授業後に児童が創作した物語『一本のさざんか』—教材「水仙月の四日（宮沢賢治・作）」—」

子どもの書いた（描いた）ものを「すばらしい」と褒めることはオリエンタリズムにすぎない。大人（教師）ができることは、せいぜい子供の持つ可能性を邪魔しないこと、できれば引き出し触発することだ。『一本のさざんか』を触発したのは、宮沢賢治の『水仙月の四日』であり、それとの出会わせ方を工夫した高橋氏の実践である（そこに他の学習者もいる）。本論考の根底に流れる「こころもち」こそ文学（国語）教育の根っこである。

■永田裕貴「『教師の学校』のあゆみ—文学研究と国語教育との架橋を目指して—」

2006年に広島大学教育学部国語文化教育学講座から初等カリキュラム開発講座に異動した難波は、初めて初等4年のゼミ生をもった。私とは初対面のこのメンバーの中に永田氏がいた（この論文集に出稿している釜山氏も）。それから20年近く、「教師の学校」のとりまとめとしてかけがえのない仲間となっている。本論考は、結城氏・長岡氏と進めてきた「教師の学校」の歩みを見事にまとめ、次のステップへの手がかり

を見せている。

■平野陽子「言葉を育てる・言葉が育てる—ハンブルグ日本人学校での経験を経て、今、伝えたい言葉—」

本論考の教員個体史としても時代の変遷としても、読み応えのあるものである。教育とは、個人（教師も学習者も）の特性とその変容×時代×環境…の関数で出来上がっているのだと改めて思わされた。「たいよう」「クレヨン」「Final」「Big Wave」「のびのび」「夢」「パレット」「きらきら」「あくしゅ」「えがお」…平野氏の学級通信の題目を並べてみた。これらの言葉で子どもたちを応援する詩ができそうである。